



Title	成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望：現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは
Author(s)	金政, 祐司
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 73-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望

- 現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは -

金政 祐司(大阪大学大学院人間科学研究科)

成人の愛着スタイルに関する研究は、特に欧米において、近年その隆盛を極めていると言える。成人の愛着スタイル研究は、その基礎に Bowlby の愛着理論を持つことから、対人関係の理解に発達的もしくは時系列的視点を提供する。そのような利点を持つゆえ、これまで様々な観点から成人の愛着に関する研究が行われ、また、膨大な量の知見が蓄積されてきた。しかしながら、成人の愛着研究は、その領域の拡大と共に、内包される問題点も増加していった。本論文では、まず、成人の愛着研究の基礎となる Bowlby の愛着理論について述べた後、成人の愛着の測定に主に用いられる2つの方法(アダルト・アタッチメント・インタビューと成人の愛着質問紙)について言及し、その後、自己報告型の質問紙法による研究知見を中心に、成人の愛着に関する実証研究の現状を概観する。さらに、現在の成人の愛着スタイル研究が抱える問題点を指摘し、今後に残された課題と愛着研究の将来的な展望について議論を行う。

キーワード: 成人の愛着スタイル、内的作業モデル、愛着次元、愛着対象、関係性

Bowlby の愛着理論

Bowlby(1969/2000, 1973/2000)の提唱した愛着理論は、動物行動学的な視点をその基礎とし、人間や動物における養育者(主に母親)と幼児との相互作用の観察研究を通して導き出されたものである。動物行動学的な視点からの愛着は、子どもが自身の安全性と生存性を確保するために有する目的志向的な行動システムを強調しており、その行動システム、言い換えるなら、愛着システムの設定目標とは養育者である大人への近接性(proximity)を保つことであるとされている(Bowlby, 1969/2000)。しかし、その後、多くの研究者によって、愛着システムは、単に身体的な近接性ではなく、より広い意味での“安心感(attachment security)”を確保するために愛着対象を近くに保つことを目的としているとの見解が示されてきた(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978; Bretherton, 1985; Sroufe & Waters, 1977)。つまり、愛着理論においては、個人が早期において安心感を確保できる経験をし得たかどうか、また、安定した安心感が提供されないような状況であれば、自身の安心感を満たすために、どのようなストラテジーを取らざるを得なかつたのか¹⁾、といったことが個人のパーソナリティ形成やその後の様々な社会的能力にまで多大な影響を及ぼすとされるのである。

また、Bowlby は、Freud を基礎とする精神分析理論からも多分に影響を受けており、彼の愛着に関する言及には、精神分析的視座を含んだ言説が数多く見られる。この点については、愛着理論が、精神分析理論と同様に、個人の早期における経験、特に幼児と養育者との間の結び付きの重要性を強調し、さらには、その

ような長期で連続的な結び付きは、子どもの情緒的、社会的発達にとって非常に重要な決定因として作用するという視点を持つことからも窺い知れる。ただ、遠藤(1992)も述べるように、精神分析理論が病理的な現象をその対象としていたのに対し、愛着理論はより一般的な関係をもその適用範疇に含めようとした点において相違が認められる。

Bowlby(1977)は、愛着を“ある特定の他者に対して強い結び付きを形成する人間の傾向(p.203)”として捉えており、そのような傾向は、早期の個人の適応性を向上させるために発達してきたとする。それゆえ、愛着理論では、早期の子どもと養育者との“関係性”を重視し、愛着的結び付きを他の社会的関係から識別するためのある種の特徴や要素が愛着システムの機能には含まれると仮定する。それゆえ、愛着関係は、以下に示すような4つの定義的特徴を有すると考えられているのである: 1. 近接性の模索(近接性を探し、維持しようとする傾向)、2. 安全な避難所(主観的または現実的な危険に直面した場合に安心を得ようとする傾向)、3. 分離苦惱(分離に対して抵抗し、苦惱する傾向)、4. 安全基地(セキュア・ベース; 安心感を提供する愛着対象の存在によって、非愛着的活動、例えば、探索行動などが活発になる傾向)。さらに、逆説的に言うならば、これらの要素を含有する関係は、愛着的結び付き、つまり愛着関係として見なされることとなる。

Bowlby(1973/2000)は、このような生得的な愛着システムの機能的特徴を言及するだけに留まらず、その後の養育環境や関係によって形成される愛着の個人差についても重要な示唆を与えている。Bowlby によると、個人の早期における愛着関係の特質は、養育者の

情緒的受容性や要求への反応性によって概ね規定されており、それゆえ、個人は養育者(愛着対象)との継続的な相互作用を通して、その関係や愛着対象に対する主観的な信念や期待といった表象、内的な作業モデルを発達させていく。また、そのような自分を取り巻く環境や愛着対象への信念や期待は、同時に自身に関する表象の形成にも影響を与える。すなわち、養育者との関係における様々な経験を通して、幼児は、“養育者が自分を受容してくれるのかどうか、自分の要求に応答してくれるのかどうか”といった愛着対象への期待と共に、“自分は保護や注意を払ってもらえるだけの価値があるのかどうか、自分は愛され、助けられるに値するのかどうか”といった自身についての主観的な信念、表象を形成させていくのである。

この自己ならびに他者についての内的作業モデル(*internal working model*)は、心的な表象として、その後の対人関係における行動や知覚、期待や信念を方向付けるような心理的メカニズムを形作っていく。それゆえ、この内的作業モデルは、*Bowlby* の提唱した愛着の継続性を提供し、青年期や成人期における対人関係に多大な影響を及ぼし得るであろう早期の関係経験の役割を理解するための要諦となるのである。

乳幼児期では、表象に内在化された愛着対象への期待や信念は、幼児と養育者間の相互作用における行動パターンとして表出されると考えられている。*Ainsworth et al.*(1978)は、この様な観点から、幼児に母親および見知らぬ人との分離と再会を経験させるストレンジ・シチュエーション法(*Strange Situation Procedure; SSP*)という実験的な観察テクニックを用いて、その間の幼児の反応に3つのプロトタイプ的な行動パターン、つまり愛着スタイルがあることを示した。これら3つの愛着スタイルは、各々の反応パターンの特徴から、安定型(*secure; B type*)、回避型(*avoidant; A type*)、アンビバレント型(*ambivalent; C type*)と名付けられた(後に、*Main & Solomon*(1989)は、*D type*として無秩序型(*disorganized*)を追加)。このような幼児期での養育者との関係において見られる愛着スタイルの違いは、上述した個人内表象としての内的作業モデルを介在要因として、青年期や成人期の個人の様々な社会的側面にまで影響を与えると考えられている。つまり、*Main, Kaplan, & Cassidy*(1985)が言及するように、“安定型や不安定型といった愛着体系における違いは、愛着関係における自身の心理的表象の違いであり、思考や行動だけでなく、注意や記憶、認知を方向付けるような各愛着スタイル特有の対人関係への内的な作業モデルを持ち得る(p. 67)”と考えられるため、幼児期における愛着スタイルの個人差は、その後の対人

関係様式や社会的な適応性の発達的違いに影響を及ぼすとされるのである。

成人の愛着研究と愛着表象

Bowlby(1977)は、愛着が“揺り籠から墓場まで(p.203)”という特徴を有し、人生を通して継続的に影響を与えるものだとする立場を取る。それゆえ、愛着は個人の早期経験を超えて、ライフ・スパンを通して重要な役割を果たすとされる。しかしながら、初期の愛着研究では主に幼児と養育者間の関係性に注目したものが主流であった。これは、上述したように *Bowlby* 自身が、愛着の早期経験を重視したことにも由来するが、その大きな原因としては、成人での愛着スタイルの測定が非常に困難を伴うものであることが挙げられる。元来、愛着とは、関係における行動様式、つまり愛着行動のパターンとして捉えられており、上述した *Ainsworth et al.*(1978)の研究のように幼児では行動レベルにおいて観察されるものである。しかし、成人においては、幼児のように愛着対象の不在に対して泣き叫ぶといった顕在性の高い行動で抵抗を示すこともなければ、自身の欲求充足の遅延に対して激しい怒りや悲しみを表出することも極めて稀である。そのため、成人の愛着スタイルや様式を行動レベルで観察、測定することはほぼ不可能であると考えざるを得ない。それゆえに、成人の愛着研究は、自己報告型の尺度法もしくはインタビュー法を用いて、個人に内在化された心的表象をその測定対象として発展してきたのである。

成人の愛着研究において、この心的表象、つまりは内的作業モデルという概念は、愛着の安定性や継続性を保証するための非常に重要な役割を担う。内的作業モデルは、直接観察不可能であるという点においてはスクリプトやスキーマといった認知構造と類似してはいるものの、それが関係性を主に問題にしているという点で異なっており、意識的な認知や行動、さらには感情的側面をも含んだ、複雑で多次元的な構造であると考えられている(*Shaver, Collins, & Clark, 1996*)。*Bowlby* によると、そのような内的作業モデルとは、早期の愛着関係での具体的な相互作用の経験を通して形成され、年齢と共にその変容可能性を減じながら、その後の個人の様々な特性や対人関係にまで影響を及ぼしていくとされる。つまり、このような発達的視点を踏襲する限りにおいて、成人の愛着研究は、乳幼児期に愛着対象との関係で形成された心的表象、内的作業モデルが、特定の関係性を超えて、その後の対人関係様式全般にまで幾つかの影響を及ぼすものであるとの仮定においてなされるのである。

アダルト・アタッチメント・インタビュー

上述したように、成人の愛着の測定には大きく分けて2つの方法が開発されてきたが、その一つに半構造化されたインタビュー法による成人の愛着の測定法、アダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview; AAI)がある(Main, Kaplan, & Cassidy, 1985)。このAAIでは、ターゲットとなる成人に対して、幼児期での母親や父親との経験や現在の両親との関係についての質問を行い、さらに、両親を表現するための5つの形容詞を挙げさせて、何故そのような形容詞を選択したかの理由を回答させる。そして、それらの質問についての回答の内容や一貫性から、個人を安定型(secure or autonomous)、回避型(dismissing or detached)、とらわれ型(preoccupied or enmeshed)の3つの類型に分類するのである(それぞれ順に幼児期の愛着の安定型、回避型、アンビバレンツ型に対応)。

このような手法を用いることで、成人の愛着スタイルの類型化を試みたMain等のアプローチは、主に発達心理学の分野で発展していった。そこで主要な関心事の一つは、養育者の愛着スタイルが養育行動や子どもの愛着形成に対してどのような影響を与えるかという愛着の世代間伝達の問題である。具体的には、AAIによって分類された親の愛着表象とSSPなどによって測定された子どもの愛着タイプとの間の対応性を検討することで愛着の世代間での伝達可能性を問うのである。このような視点を持つ研究はこれまでいくつか行われており、そこでは、概ね愛着の世代間伝達の妥当性を示唆する結果が得られている(Crowell & Feldman, 1991; Fonagy, Steele, & Steele, 1991)。また、本邦においても、数井・遠藤・田中・坂上・菅沼(2000)が、母親の愛着表象をAAIで、子どもの愛着行動を愛着Qセット法によって測定し、それらの対応を検討した結果、安定型の母親の子供は不安定型の母親の子供よりも愛着安定性が高いことが示されており、愛着の世代間伝達仮説を支持するものとなっている。

さらに、このような愛着の世代間伝達の問題は、子どもの愛着に注目した場合、愛着の継続可能性や幼児期以後の社会的適応性との問題とも密接に関連してくる。前者の愛着の継続可能性については、近年数多くの報告がなされており、それらは主に縦断的研究を行うことでSSPでの愛着(幼児期)とAAIで測定された愛着表象(成人期)との間にどの程度の対応が見られるのかに焦点が当てられている。それらの報告によると、重大でネガティブな出来事を経験していない、比較的安定した環境に育ったサンプルでは、幼児期と成人期の愛着スタイルとの間にかなり高い一致(二分類では72%~77%)が見られることが示されており(Waters,

Merrick, Trebloux, Crowell, & Albershein, 2000; Hamilton, 2000)、これらは愛着の継続性を示すものであると考えられる²⁾。

また、愛着と社会的適応性との関連についても、大学生を対象としていくつかの研究が行われており、AAIによって安定型愛着に分類された個人は、自己報告からだけでなく、他者(友人)からの報告においても社会的な適応性の高さが示されるという結果が得られている(Kobak & Sceery, 1988)。さらに、AAIで測定された愛着表象は、青年期の恋愛関係における諸変数とも関連することが示されており(Crowell, Trebloux, Gao, Fyffe, Pan, & Waters, 2002)、例えば、安定型の愛着表象を持つ者は、ストレス下の恋人に対して適切なサポート行動を行うことなどが報告されている(Simpson, Rholes, Ornean, & Grich, 2002)。これらの結果は、成人期における両親への愛着表象が、個人の対人関係様式や社会的な適応性にまで影響を与えていていることを示唆するものであろう。

このような発達心理学的アプローチから蓄積されてきた成人の愛着研究の知見は、愛着の時間的展望を考慮する上で非常に有益なものが多く、また、AAIが両親への愛着表象をその測定対象としていることから、親子や家族関係の他の文脈への般化可能性について貴重な情報を提供している。

しかしながら、愛着理論が、全般的なパーソナリティ発達の理解を促すために展開されたものであり(Bowlby, 1980/1982)、また、愛着の体系的な違いが、対人関係への思考や行動、認知の違いを示すものである(Main *et al.*, 1985)のだとすれば、愛着の測定の対象とされるべきものは、両親への心理表象だけに限らず、現在の対人関係(特に親密な関係)への態度、もしくは一般的な他者(主に愛着対象)への期待や信念といったものが扱われて然るべきであろう。このような視点から、多数の研究者たちが、成人の愛着を分類、もしくは測定するための自己報告型の尺度を作成しており、また、それらを用いて様々な側面から“成人の愛着”に関する検証を行ってきた(Bartholomew & Horowitz, 1991; Collins & Read, 1990; Hazan & Shaver, 1987; Mikulincer, Florian, & Tolmacz, 1990; Simpson, 1990; 詫摩・戸田, 1988)。次項では、主に、このような自己報告型の尺度法によるアプローチから成人の愛着についての検討を行った研究を中心に話を進めていく。

成人の愛着スタイル

これまで述べてきたAAIによる成人の愛着研究では、愛着の表象は、両親、主に母親との関係性やその記憶

によって測定、分類されていた³⁾。これに対して、自己報告型の尺度法による愛着研究、言い換えるなら社会心理学的立場からの愛着へのアプローチは、乳幼児期から児童期や青年期、成人期にかけて培われたであろう自己と一般的な他者(主に愛着対象)への信念や期待(Bartholomew & Horowitz, 1991)といった命題的態度、すなわち、成人の“愛着スタイル”を仮定することによってなされる。ここでの成人の“愛着スタイル”とは、愛着の理論的な背景から、主に乳幼児期の母子関係においてそのベースが形成され、愛着の継続可能性を提供する内的作業モデルの作用によって、初期モデルにある程度沿った形で発達していくような個人の認知する自己および他者への信念や期待として捉えられる。そして、そのような信念や期待としての成人の愛着スタイルは、対人関係、特に恋愛関係といった親密な二者関係における認知や行動、感情や、さらには、社会的な適応性にまで影響を及ぼすものであると考えられるのである。

愛着としての恋愛関係

これまで述べてきたように、愛着理論の基本的な原理である愛着システムや愛着的関係は、個人の生涯を通して重要な役割を担うという Bowlby の見解から、成人においても愛着は二者関係における人間的繋がり(例えば、恋愛や性的関係)を形作る(Bowlby, 1969/2000, 1977)とされる。実際、Weiss(1991)や Shaver & Hazan(1988)は、上述したような幼児期における4つの愛着的特徴が、成人におけるいくつかの関係においても見られることを指摘している。例えば、ある種の関係においては、成人が時折パートナーとの緊密さを求める(1. 近接性の探索)や、ストレス時にはパートナーに慰めを求める(2. 安全な避難所)、また、パートナーに会えなくなると苦悩を経験すること(3. 分離苦悩)や、それらの関係から信頼や安全を供給されること(4. 安全基地; セキュア・ベース)など、成人におけるいくつかの関係、特に夫婦関係や恋愛関係は、愛着的な繋がりの基準を満たすものであり、それゆえ、それらの関係は愛着的関係として捉えることができるるのである。

このような観点から、Hazan & Shaver(1987)は、成人における恋愛関係を理解するためのフレームワークとして愛着理論を用いた研究を行った。まず、彼女らは、Ainsworth *et al.*(1978)による幼年期の3つの愛着スタイルについての記述を参照に、それら愛着スタイルと対応するような3カテゴリー(安定型、アンビバレント型、回避型)に成人を分類するための自己報告型質問紙尺度を作成した。さらに、この Adult Attachment Scale(成人の愛着尺度)によって、各愛着スタイルに分

類された回答者(研究1では広告でリクルートされた回答者、研究2では大学生)は、幼児期の家族関係や父親や母親に持つ印象、恋愛関係への信念、恋愛経験などに違いが見られることが示されたのである⁴⁾。

特にここで重要なポイントとなるであろう成人の愛着スタイルと幼児期での愛着経験や愛着対象への態度との関連性については、その後いくつかの研究で確認されている。例えば、Mikulincer *et al.*(1990)や Mikulincer & Nachshon(1991)では、Hazan & Shaver(1987)の研究と同様に、成人の愛着スタイル間に母親への印象の違いがあることを示しており、また、幼児期における母親との分離経験を対象とした Feeney & Noller(1990)の研究においても愛着スタイル間の違いは概ね再現されている⁵⁾。

これらの結果を踏まえて、Shaver & Hazan(1988)は、愛着としての恋愛を理論的な観点から議論し、恋愛と幼児期における愛着との間の類似点は、上記したような近接性の探索やセキュア・ベースといったものだけではなく、行動や感情的側面、例えば、抱擁、アイ・コンタクト、お互いに強い共感性を示すといった点においても見られることを指摘し、恋愛それ自体が子どもと養育者間の愛着といくつかの共通点を有するような愛着プロセスであると定義づけた⁶⁾。

さらに、Shaver & Hazan(1988)は、愛着的視点から恋愛を捉えることの利点について、これまでの恋愛研究が現象を記述することにその力点が置かれていたのに対し、理論的な観点からそれらの現象を理解できるという点にあると述べている。言うならば、現象記述的であったこれまでの恋愛関係や親密な関係性の研究に対して、愛着的視点は、仮説生成的な研究を可能にさせるのである。

また、上記のことと関連するが、愛着的視点は、愛着理論が発達的視点を持つ理論であることから、少なくともこれまで並列的に扱われていた恋愛や愛の理論や研究に対して、それらの布置関係を考慮に入れた研究的視座を提供する⁷⁾。さらに、愛着が悲嘆や孤独感といった対人関係に関する概念を包括的に扱うことができるという点(Shaver & Hazan, 1988)もその有用性を示す点としてあげができるであろう。

成人の愛着スタイルと愛着次元

Hazan & Shaver(1987)の作成した成人の愛着スタイル尺度は、強制選択法による単純な類型論であるため、愛着スタイルの混合型を無視し、カテゴリーに内在する重要な個人差変数を軽視することとなり、また、单一項目での測定には内的信頼性について疑問が残るといった問題点が指摘されている(Simpson, 1990)。そ

れゆえ、愛着スタイルの測定法については、その後、いく人かの研究者によって改善、改良が試みられている。

その一つに、成人の愛着スタイルを次元軸から捉えようとする動向がある。Collins & Read(1990)では、成人の愛着スタイル尺度の記述を愛着スタイルごとに5項目ずつに分解した15項目と、それらに加えて、幼児期の愛着で重要な2要素であると考えられる、“愛着対象が必要な時に受け入れてくれるかどうか”、“養育者との分離に対する反応”という質問を3つの愛着スタイルごとに用意し、各質問について回答者に7段階の評定を求めた。そして、それら21項目について因子分析を行った結果、依存、不安、親密さという3因子が抽出されることを示し、それらを愛着における主要な3つの次元であると考えた。

わが国においても詫摩・戸田(1988)ならびに戸田(1988)が、成人の愛着スタイル測定尺度の邦訳を行った際に、Hazan & Shaverの成人の愛着尺度での記述をいくつかの文章に分けて尺度項目とし、それらをリッカート法によって評定する愛着スタイル尺度を作成している。この愛着スタイル尺度では、3つの愛着スタイルの特徴と対応するような3因子が抽出されており、さらに、各愛着スタイル得点と恋愛体験および母親や恋人の印象との関連について検討を行った結果、Hazan & Shaver(1987)の研究とほぼ同様の傾向が示されている。このことは、本邦での愛着という概念の適用可能性、ならびに作成された愛着スタイル尺度の妥当性を示すものと考えられよう。

さらに、Bartholomew(1990)は、愛着のパターンについて、Bowlby(1973/2000)の主張するところの自己の作業モデルと他者についての作業モデル(特に愛着対象に対する)の両方を加味することで、それら作業モデルを次元軸とした4つの愛着スタイルの類型化モデルを提出している。このモデルでは、自己と他者という2つの次元軸が、ポジティブとネガティブの二つの方向性、すなわち、自分が愛情を注がれるに値すると思えるか否か、他者が自分を受け入れてくれるか否か、という2つの極を有する。そして、自己と他者の2軸とそれら2つの極を組み合わせることによって愛着スタイルは4つに分類されるのである。それら4つの愛着スタイルとは、自己と他者の双方にポジティブなモデルを持つ安定型(Secure)、他者にはポジティブなモデルを持つが自己にはネガティブなモデルを持つとらわれ型(Preoccupied)、自己にはポジティブなモデルを持つけれども他者へはネガティブなモデルを持つ拒否型(Dismissing)、自己と他者の双方にネガティブなモデルを持つ恐怖型(Fearful)である⁹⁾。

このモデルの検証を行うために、Bartholomew & Horowitz(1991)は4つの愛着スタイルの特徴を示すような質問項目(対人関係尺度；Relationship Questionnaire)を作成し、各々の質問について自己報告、友人による報告、インタビューの3つの方法によって愛着スタイル得点の評定値を求めた。それら愛着スタイル得点について主成分分析を行い、2次元上にプロットしたところ各愛着スタイルにおける3つの方法は同一次元上にプロットされ、さらに4つの愛着スタイル得点の布置関係は理論に沿った形で表れることができた。さらに、3人のインタビュアーによって採点された愛着スタイル得点から各被験者の愛着スタイルを分類し、自尊心や自己開示、対人問題のプロフィールにおける愛着スタイル間の差について検討を行った結果、Bartholomew(1990)の愛着の4類型モデルを支持するような違いがそこに見られたことを報告している。

このBartholomew & Horowitz(1991)の対人関係尺度から、上述した愛着の2つの次元軸得点、つまり、自己および他者モデル得点を求める式は、Scharfe & Bartholomew(1994)により提出されている⁹⁾。この式により算出される愛着の2つのモデルの得点については、Griffin & Bartholomew(1994)が確証的因子分析を行い、自己報告、友人の報告、インタビューの3つの方法を通して測定された自己・他者モデル得点がそれぞれ潜在的な2つの変数に収斂すること、さらに、自己モデル得点は、自己受容度や自尊心といった自己の概念とは高い関連性を持つが、社交性や対人的な思いやりなどの他者指向性とはほぼ関連がなく、他者モデル得点についてはその反対の傾向が見られることを明らかにし、その妥当性を示している。

これらのこととは、成人の愛着スタイルが2つの愛着次元から理解されやすいものであることを示していると言えるであろう。実際、Feeney, Noller, & Roberts(2000)は、愛着次元が“関係への不安(anxiety over relationship)”と“親密さへの快適性(comfort with closeness)”の2つの軸から成るとの見解を提示し、それらは、前者が Bartholomew & Horowitz(1991)での自己モデルに、後者が他者モデルに対応するものであるとされる。また、近年、主に恋愛対象もしくは恋愛関係全般への愛着(romantic attachment)を測定するものとして作成された尺度(Brennan, Clark, & Shaver, 1998; Fraley, Waller, & Brennan, 2000)、ならびにその邦訳版(中尾・加藤, 2002)においても、“親密性の回避”と“関係への不安”といった2つの次元から成人の愛着スタイルの測定が行われている。

成人の愛着スタイルと親密な関係

これまで述べてきたように、成人の愛着スタイルは、対人関係、主に親密な異性関係や恋愛関係における諸変数との関連について様々な検討がなされてきた。例えば、Hazan & Shaver(1987)の研究では、安定型の愛着スタイルの者は、これまでの恋愛経験において、より幸せで、相手に対して信頼や友情を感じやすい傾向があること、アンビバレン特型の者は、相手への信頼感が低く、嫉妬を感じやすいことなどが報告されている。また、Feeney & Noller(1990)の研究では、愛着スタイルによって、恋愛経験自体が異なることが示されており、回避型の者は、恋愛経験が少なく、また、これまでの恋愛において強い愛情を感じていたとする割合が低い傾向があった。これらの結果は、愛着スタイルが親密な異性関係について高い予測性を持つものであることを示していると言える。

愛着スタイルと自己開示

対人関係の進展において重要な要因となる自己開示と愛着スタイルとの関連については、日記や観察法、日常の行動についてのチェックリスト法など様々な方法により検証されてきている(Mikulincer & Nachshon, 1991; Pietromonaco & Barrett, 1997; Tidwell, Reis, & Shaver, 1996)。それらの研究における各愛着スタイルの主な特徴としては、安定型の人は、一般的に自己開示の程度が高く、適切で柔軟な開示を行う傾向があるが、アンビバレン特型や回避型といった不安定型の人は、自己開示の程度に自身の恋愛相手と未知の人との間であまり差が見られないことが示されている。ただ、このアンビバレン特型と回避型の自己開示の対象による弁別性の低さについては、各々別の解釈がなされており、回避型の場合は、恋愛相手との親密性からの回避が原因であるとされ、アンビバレン特型では、未知の他者に対する親密性への強い希求から来るものであると考えられている。

愛着スタイルと感情の経験と表出

愛着スタイルと感情について、Ainsworth *et al.*(1978)の研究結果で見られたように、愛着スタイルの違いが、関係における感情経験ならびに感情のコントロールにおいて示されるといった観点からこれまで多数の研究が行われておらず、また、それらの間に強い関連があることも報告されている。例えば、Simpson(1990)の研究では、安定型の愛着スタイルは、ポジティブな感情とは正の、ネガティブな感情とは負の関連があり、反対に不安定型(アンビバレン特型・回避型)の愛着スタイルは、安定型とは逆の傾向が見られることが示された。また、Tidwell *et al.*(1996)では、日常の相互作用での感情経験においても愛着スタイル間の

違いが見られており、安定型の愛着スタイルの人は、快適さや気楽さといったポジティブな感情を経験しやすく、反対に回避型の人は、困惑や緊張といったネガティブな感情を多く経験しているという結果が得られている。

さらに、より直接的に、愛着スタイルと愛情との関連を検討した研究も見られており、安定型やアンビバレン特型の人は、回避型の人と比べて親密な異性への愛情の程度が高く(Feeney & Noller, 1990; 金政・大坊, 2002a)、また、安定型の愛着スタイルは、愛情とは正の関連を示す(金政・大坊, 2002a; Simpson, 1990)といった報告がある。これらの研究で共通していることは、安定型の愛着スタイルは比較的ポジティブな感情とは正の関連を、ネガティブな感情とは負の関連を示し、回避型の愛着スタイルはその反対の傾向を示すということである。

また、二者関係におけるある特定の感情経験と表出についての検証を行った研究もある。交際中のカップルを対象にした Feeney(1995)の研究では、不安定な愛着傾向は、怒り、悲しみ、不安といった感情を頻繁に経験しやすいことと関連しており、同様に、結婚したカップルについてのポジティブな感情を対象にした研究(Feeney, 1999)でも、愛着は感情経験や表出と関連があることが示されている。Feeney(1999)の研究では、“関係への不安”的強い夫婦は互いに愛を表出しない傾向があり、また、“親密さへの快適性”的低い夫は、愛や幸せ、満足感といった感情を表出しづらいことが示されている。これらの結果は、成人の愛着スタイルがカップルの関係維持において重要な役割を果たしていることを示唆するものであろう。

愛着スタイルと関係の特徴

愛着スタイルは親密な関係における特徴、例えば、関係満足度や信頼、相互依存度やサポート提供といった事柄と深い関連があることがこれまでの研究により示されている。

愛着スタイルと関係の質との関連について検討を行った研究の中には、性差が見られることを指摘するものもあり、男性では回避型傾向(親密性回避)の高さが、女性ではアンビバレン特型傾向(関係不安)の高さが、関係の質の低さと結び付いているといった報告がなされている(Collins & Read, 1990; Simpson, 1990)。このような愛着と関係の質との関連における性差について、Collins & Read(1990)は、男性の低い表出性ならびに女性の独占欲が、関係の満足度の低さと関連することを示した先行研究(Davis & Oathout, 1987)との一貫性を挙げて、その説明を行った。

また、愛着スタイルと関係満足度との関連性につい

では、結婚関係においても見られており、安定型の愛着スタイルは、結婚生活の満足度とポジティブな関連があるという結果が得られている(Feeney, 1994; Feeney, 1999)。さらに、Feeney(1994)の研究では、夫婦の愛着スタイルの相互作用も見られており、女性(妻)の関係不安のネガティブな影響は、男性(夫)の“親密さへの快適性”が低い場合により顕著になることが示されている。

さらに、愛着スタイルと親密な関係の特徴との関連は、自己報告によるものだけでなく、カップル間の行動的指標においても見られる。Simpson, Rholes, & Nelligan(1992)のカップルを対象とした研究では、男性の回避傾向は、ストレス状況下にある女性へのケアの適切さと関連しており、回避傾向が低いほど不安を感じている女性に対してケアを提供する割合が高かった。また、女性のケア探索行動も愛着次元と関連することが示されており、回避傾向が低いほど、ストレス状況下においてケアを求めやすいという結果が得られている。さらに、上述の研究での性役割を逆転させた実験(Simpson *et al.*, 2002)においても、女性の回避傾向の高さは、男性へのケア提供の低さを予測していた。このような愛着スタイルとケア傾向との関連性は、より日常的なエアポートでのカップルの別離場面においても観察されており(Fraley & Shaver, 1998)、その関連が堅固なものであることを示唆している。

これまで述べてきたように、成人の愛着スタイルは、親密な関係での質や満足度、また、カップル間のサポート傾向とも関連を示すことから、それは、さらに関係の安定性や持続性にも影響を与えるものであると考えられよう。実際、Hazan & Shaver(1987)の研究では、安定型の者は、他の愛着スタイル型の者と比べて、恋愛関係が長期間持続しやすいことが示されている。また、Simpson(1990)の研究においても、回避型の男性は関係の崩壊に際してあまり苦悩していなかったという結果が得られており、これは回避型の男性における親密な関係の不安定さに繋がるものであると考えられる。

成人の愛着研究における課題と展望

これまで述べてきたように、自己ならびに一般的な他者への信念や期待として捉えられる成人の愛着スタイルは、対人関係での様々な行動や諸経験に影響を与える。これは、各愛着スタイルに特有の作業モデルが、個人の事象への注意や認知、思考を方向付けるような働きを持つと考えられるためである。それゆえ、このことは、ある関係において、表面的、外的には同一の行動や相互作用であったとしても、個人の主観的な側面の作用によっては、そこでやり取りされるものの意味合いや

その解釈は全く異なってくることを示唆している。つまり、ある関係性や事象への事前に構築された信念や期待によって、その後の出来事は個々人にとって異なった捉えられ方をする可能性があるのである。実際、近年の研究では、成人の愛着スタイルによって顔面表情の変化への敏感さが異なるという報告がなされている(Neidenthal, Brauer, Robin, & Innes-Ker, 2002)。それゆえ、このような意味においては、成人の愛着研究は、事象に対して積極的に意味を付与しようとする志向性を備えた主体としての個人をその対象とし、関係性の問題に取り組んできたと言えるのである。

ただ、これまで成人の愛着については膨大な量の研究が提出されてきたが、その一方で、成人の愛着研究が内包する問題点は少なくない。ここでは、大きく2つの問題を取り上げ、筆者なりの見解を述べたい。一つは、成人の愛着研究が内的作業モデルという概念に依拠することによって、愛着の安定性もしくは継続性を仮定したことに端を発する問題、いま一つは、愛着が関係性に基づいた理論であることから、個人の愛着の対象となるのは誰なのかという問題である。

愛着スタイルの安定性

愛着スタイルの安定性もしくは継続性については、これまで様々な議論がなされてきているが、多くの愛着研究者の基本的な見解は、愛着における内在化された作業モデルは一般に堅固なものであり(Shaver *et al.*, 1996)、それゆえ、個人は作業モデルに関連するような期待を持ち、それを自己成就させる傾向がある(Feeney *et al.*, 2000)ということである。例えば、不安定な愛着スタイルの者は、他者が自分を拒否するかもしれないという予期を持っているため、対人関係においてより自己防衛的な行動を取る可能性がある。そして、そのような自己防衛的な行動を取るがゆえに、他者からの拒否を招く結果となり、その個人の持っていた期待を成就させる形に終わるといったことが考えられるのである。

つまり、上述したような事象に対して積極的に意味付与する志向性は、愛着理論の文脈では、自己成就的傾向(Self-fulfilling; Darley & Fazio, 1980)、もしくは自己確証動機(Swann, 1987)といった作用として働き、愛着の安定性もしくは継続性に寄与するものとなってくるのである¹⁰⁾。このような愛着の安定性と自己成就的傾向との関連については、Tidwell *et al.*(1996)やCook(2000)、Feeney *et al.*(2000)や金政・大坊(2002b)でも議論されるところであり、今後検討されていく必要性がある。

このような、成人の愛着スタイルの安定性についてこれまで検証を行った研究はあまり見られていないが、

少なくとも4年の期間にわたって成人の愛着スタイルの3類型が、比較的安定性を示すものであったという報告はなされている(Kirkpatrick & Hazan, 1994)。また、愛着の文脈とは離れるが、Conger, Cui, Bryant, & Elder(2000)は、被験者が14歳の時の親子間、夫婦間、兄弟間の相互作用が、8年後の同一被験者の恋愛関係での適応性を予測し得るのかという縦断的研究を行っている。その結果、親の子供への養育態度(親の社会化仮説)が、その後の青年期での恋愛の関係の質(幸福、満足、コミットメント)を最も予測するものであったことから、Congerらは、研究結果と愛着理論との一貫性についての言及を行っている。

しかしながら、成人の愛着スタイルを完全に変容可能性のない、決定論的なものとして捉えることは、愛着理論の持つ発達的視座を矮小化させるものとなるであろう。確かに、愛着の安定性を保証するための内的作業モデルは、時系列的に一貫性のある個人内の特性として捉えられるものであるが、同時に、それは常に関係性の中で塗り替えられていくものである。Piaget(1952)の言葉を借りるならば、内的作業モデルは、「同化(assimilation)と調節(accommodation)」の内に変容を繰り返す。つまり、内的作業モデルは、閉ざされた知識構造というよりも、関係性に対して、もしくは社会的文脈に対して積極的に開かれた知識体系として把握されるものなのである。

もちろん、本稿でも述べたように、作業モデルの変容可能性は、年齢の増加と共に減じていくものと考えられる。しかし、Bartholomew & Horowitz(1991)やFeeney *et al.*(2000)の述べるように、人生や人間関係の重要な転機、例えば、就職や結婚、出産や子育てといった事がらにおける個人の社会的役割の変化や、重要なパートナーとの出会いや別れといった対人関係の変化は、成人の愛着スタイルを変容させるのに十分な意味合いを持ち得るであろう。今後は、そのような重要な対人関係や社会的役割の変化に伴う愛着パターンの変容可能性についての研究展開が望まれる。

愛着対象の問題

愛着理論が、母子関係をその基礎に置く以上、成人の愛着スタイル研究においても関係性は重要な要因となる。それゆえ、成人にとっての愛着の対象とは誰なのかということは重要な問題である。そして、この問題は、結局のところ、愛着に関連する作業モデルがどのような状況や関係において活性化されやすいのか、つまり、成人の愛着スタイルの適用範囲は何処までなのかという問い合わせにまで拡張されていくと考えられる。

このような、成人の愛着スタイルの適用可能な状況や関係については、いくつかの見解があり、愛着に関

連する作業モデルは、ある特定の状況、例えば、自身の安全性へ脅威を感じるような状況において活性化するという立場(Mikulincer, Florian, & Weller, 1993; Simpson *et al.*, 1992)や、異性との相互作用において特に活性化されるとする立場(Tidwell *et al.*, 1996)、また、より一般的な社会的状況においても作業モデルは顕在化し得るもので、社会的な行動全般に影響を及ぼすような性質をもっているとする立場がある(Collins & Read, 1994; Griffin & Bartholomew, 1994)。さらには、友人や兄弟との関係においても愛着スタイルによる違いが見られることや(Hazan & Shaver, 1994; Trinke & Bartholomew, 1997)、未知の他者や日常の相互作用においても各愛着スタイルは異なった傾向を示すといった報告(Horppu & Ikonen-Varila, 2001; Pietromonaco & Barrett, 1997; Westmaas & Silver, 2001)もあり、成人の愛着スタイルは、対人関係全般において顕在化しうるものであるといった捉え方もできる。

しかしながら、最近の研究では、インタビュー形式のAAIで測定されるものを両親への愛着作業モデル、自己報告型の成人の愛着質問紙(Adult Attachment Questionnaire, AAQ)において測定されるものを恋愛における愛着作業モデルとして区別し、それら双方が予測するものの違いについて検討がなされてきている(Shaver, Belsky, & Brennan, 2000; Simpson *et al.*, 2002)。つまり、それらの研究においては、愛着の対象は、Shaver & Hazan(1988)での見解と同様に、親と恋愛相手に限られていることになる。また、Mikulincer & Selinger(2001)の研究では、場面想定法ではあるものの、状況に応じて、親密な友人が愛着の対象にも、親和(affiliation)の対象にもなり得ることが示されている。

これらのこと考慮すれば、成人における愛着システムもしくは作業モデルは、社会的文脈や関係性により変動し、愛着に関連する認知、感情、行動に影響を与えるような多層的なモデル(Simpson *et al.*, 2002)を想定せざるを得ない。今後は、そのような多層的なモデルを想定することで、愛着の個人内の変動についての検討を行っていく必要があるであろう。例えば、母親や父親、親密な友人や恋愛相手といった異なる他者に対する印象などの評定の変動に愛着スタイルによる差異が見られるのかについて、もしくは、愛着スタイル自体を状況や対象に応じて変動するものと捉え、異なる対象への異なる愛着スタイルを検討していくといった方法も考えられよう¹¹⁾。その場合、Cook(2000)で行われたように、回答者本人のものだけでなく、いく人かの愛着対象と見なされる他者からもデータを収集し、

SRM(Social relationship model)を用いて、個人内の影響、関係性による影響、関係全体の影響を分解することでより詳細な検討が可能となるであろう。

また、愛着の変動は個人内のものと共に、関係内の変動の可能性も十分に考えられる。つまり、現在進行中の恋愛関係を愛着が形成される関係であると考え、その関係の進展自体が愛着形成のプロセスであると捉えるのである(若尾, 2002; Zeifman & Hazan, 2000)。ただ、このように恋愛関係を愛着形成プロセスとして捉え、現在の関係の機能的な側面に着目した場合、これまでの成人の愛着スタイル研究では予想されるものであった、ある関係で経験される感情や関係への満足度、さらには、恋人との相互作用自体が、愛着形成の有無、もしくは愛着形成段階の指標となってくる。つまり、成人の愛着形成過程モデル(Zeifman & Hazan, 2000)においては、愛着は諸変数を予想するためのものではなく、予想されるものとなるのである。

このような観点からは、愛着の安定性はもはや不問のものとなり、それゆえ、愛着の安定性を提供するための内的作業モデルという心的表象を仮定する必要性はなくなる。ここにおいて、成人の愛着研究には、対象となる相手によって変動するような、すなわち、愛着の継続性を仮定しない愛着形成プロセスを扱う方法と、これまでの研究で主に取られてきた視点、つまり、個人差として継続性を仮定する成人の愛着スタイルから関係性を予測するという二つのパースペクティブが提出されることになる。今後、成人の愛着研究は、このような二つの形式に分割されていくことで、さらなる発展を向かえることが望まれる。

確かに、成人の愛着研究は、それが Bowlby の愛着理論をベースに持つことから、発達的な観点を有し、また、個人の社会的、感情的な発達は、それ以前の社会的関係と関連するというパーソナリティ研究での見解と一貫するなど、魅力的な点も多い。しかしながら、そのような魅力的な側面を持つがゆえに、成人の愛着研究は、これまで述べてきたような問題点を同時に孕んでしまっていると言えよう。Simpson *et al.*(2002)も指摘するように、今後、愛着についての研究を行っていく場合には、研究者は、自分が理論化を試みようとしている、もしくは、測定している作業モデルがどのようなものであるのか、また、自分が捉えている愛着がどのレベルのものであるのかという視点を明確にしていく必要性があるであろう。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., & Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.

Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.

Bowlby, J. 1969/2000 *Attachment and loss, Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. 1973/2000 *Attachment and loss, Vol. 2: Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. 1977 The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of Psychology*, 130, 201-210.

Bowlby, J. 1980/1982 *Attachment and loss, Vol. 3: Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment Theory and Close Relationships* (pp.46-76). New York: Guilford Press.

Bretherton, I. 1985 Attachment theory: Retrospect and prospect. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 3-35.

Collins, N. L. & Read, S. J. 1990 Adult attachment working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.

Collins, N. L. & Read, S. J. 1994 Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships* (Vol. 5, pp.53-90). London: Jessica Kingsley.

Conger, R. D., Cui, M., Bryant, C. M., & Elder, Jr., G. H. 2000 Competence in Early Adult Romantic Relationships: A Developmental Perspective on Family Influences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 224-237.

Cook, W. L. 2000 Understanding Attachment Security in Family Context. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 285-294.

Crowell, J. A. & Feldman, S. S. 1991 Mothers' working models of attachment relationships and mother and child behavior during separation and reunion. *Developmental Psychology*, 27, 597-605.

Crowell, J. A., Treboux, D., Gao, Y., Fyffe, C., & Pan, H., & Waters, E. 2002 Assessing secure base behavior in adulthood: development of a measure, links to adult attachment representations, and relations to couples' communication and reports of relationships. *Developmental Psychology*, 38, 679-693.

Darley, J. M. & Fazio, R. H. 1980 Expectancy

confirmation processes arising in the social interaction sequence. *American Psychologist*, 35, 867-881.

Davis, M. H. & Oathout, H. A. 1987 Maintenance of satisfaction in romantic relationships: Empathy and relational competence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 397-410.

遠藤利彦 1992 愛着と表象 - 愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の外観 - 心理学評論, 35, 201-233.

Feeley, J. A. 1994 Attachment style, communication patterns, and satisfaction across the life cycle of marriage. *Personal Relationships*, 1, 33-348.

Feeley, J. A. 1995 Adult attachment and emotional control. *Personal Relationships*, 2, 143-159.

Feeley, J. A. 1999 Adult attachment, emotional control, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, 6, 169-185.

Feeley, J. A. & Noller, P. 1990 Attachment styles as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 281-291.

Feeley, J. A., Noller, P., & Roberts, N. 2000 Attachment and Close Relationships. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close Relationships* (pp.185-201). Thousand Oaks, CA: Sage.

Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representation of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.

Fraley, R. C. & Shaver, P. R. 1998 Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1198-1212.

Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. 2000 An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 350-365.

Griffin, D. & Bartholomew, K. 1994 Models of the self and other: Fundamental Dimensions underlying measures of adult. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 430-445.

Hamilton, C. E. 2000 Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, 71, 690-694.

Hazan, C. & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

Hazan, C. & Shaver, P. R. 1994 Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Journal of Psychological Inquiry*, 5, 1-22.

Hendrick, C. & Hendrick, S. S. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 392-402.

Hendrick, C. & Hendrick, S. S. 1989 Research on love: Does it measure up? *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 784-794.

Horppu, R. & Ikonen-Varila 2001 Are attachment styles general interpersonal orientations? Applicant's perceptions and emotions in interaction with evaluators in a college entrance examination. *Journal of Social and Personal Relationships*, 18, 131-148.

金政祐司・大坊郁夫 2002a 青年期の愛着スタイルと恋愛へのイメージ - 青年期の愛着スタイルと親密な異性関係 (1) - 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 187.

金政祐司・大坊郁夫 2002b 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 - 青年期の愛着スタイルと親密な異性関係 (2) - 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 486-487.

数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 48, 323-332.

Kirkpatrick, L. E. & Hazan, C. 1994 Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, 1, 123-142.

Kobak, R. R. & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence: working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, 59, 135-146.

Main, M. & Solomon, J. 1989 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. Greenberg, D. Cichetti, & M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years*. Chicago: University of Chicago Press.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.

Mikulincer, M. & Nachshon, O. 1991 Attachment styles and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 321-331.

Mikulincer, M. & Selinger, M. 2001 The interplay between attachment and affiliation systems in adolescent's same-sex friendships: The role of attachment style. *Journal of Social Personal Relationships*, 18, 81-106.

Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. 1990 Attachment styles and fear of personal death: a case study of attachment regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 273-280.

Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. 1993 Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 817-826.

中尾達馬・加藤和生 2002 Brennan et al. (1998)の成人愛着スタイル尺度の日本語版作成とその妥当性の検証 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 300.

Neidenthal, P. M., Brauer, M., Robin, L., & Innes-Ker, A. H. 2002 Adult Attachment and the Perception of Facial Expression of Emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 419-433.

Piaget, J. 1952 *The Origins of Intelligence in Children*. New York: International Universities Press.

Pietromonaco, P. R. & Barrett, L. F. 1997 Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1409-1423.

Scharfe, E. & Bartholomew, K. 1994 Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, 1, 23-43.

Shaver, P. R. & Hazan, C. 1988 A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 473-501.

Shaver, P. R., Belsky, J., & Brennan, K. A. 2000 The adult attachment interview and self-reports of romantic attachment: associations across domains and methods. *Personal Relationships*, 7, 25-43.

Shaver, P. R., Collins, N., & Clark, C.L. 1996 Attachment styles and internal working models of self and relationships partners. In G. J. O. Fletcher & J. Fitness (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach* (pp.25-61). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Simpson, J. A. 1990 Influence of Attachment Styles on Romantic Relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 971-981.

Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. 1992 Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.

Simpson, J. A., Rholes, W. S., Orina, M. M., & Grich, J. 2002 Working models of attachment, support giving, and support seeking in a stressful situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 598-608.

Sroufe, L. A. & Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 48, 1184-1199.

Swann, W. B. 1987 Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1038-1051.

詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度 成人愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.

Tidwell, M. O., Reis H. T., & Shaver, P. R. 1996 Attachment, attractiveness, and social interaction: A Diary Study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 729-745.

Trinke, S. J. & Bartholomew, K. 1997 Hierarchies of attachment relationships in young adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 14, 603-625.

戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル 作業仮説(working models)からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.

若尾良徳 2002 成人のアタッチメント研究の現状と問題特性から関係性の概念へ 東京都立大学心理学研究, 12, 29-39.

Waters, E., Merrick, S., Trebloux, D., Crowell, J., Albershein, L. 2000 Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71, 684-689.

Weinfield, N. S., Sroufe, L. A., & Egeland, B. 2000 Attachment from infancy to early adulthood in high-risk sample: Continuity, discontinuity and their correlates. *Child Development*, 71, 695-702.

Weiss, R. S. 1991 The attachment bond in childhood and adulthood In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp. 66-76). London: Tavistock/Routledge.

Westmaas, J. L. & Silver, R. C. 2001 The Role of Attachment in Responses to Victims of Life Crises. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 425-438.

Zeifman, D. & Hazan, C. 2000 A process model of adult attachment formation In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The Social Psychology of Personal Relationships* (pp. 37-54). Chichester: John Wiley & Sons, Inc.

註

- 1) 例えば、安定した安心感が養育者から提供されない場合、子どもは自身の心的な安心感を確保するため、過度に感情的な側面を表出することで養育者の関心を引くか、もしくは養育者に対する興味自体を軽減させていくこととなる。
- 2) しかしながら、リスク確率の高い、不安的な環境においては、愛着の連続性はそれほど保証されないという報告もあり(Weinfield, Sroufe, & Egeland, 2000)、愛着の継続可能性における環境要因の重要さを伺わせている。
- 3) Shaver, Belsky, & Brennan(2000)では、AAIで測定されるものを潜在的な“養育に影響を与えるような愛着に関する心の状態”、自己報告型の尺度で測定されるものを顕在的な現時点での“恋愛に影響を与えるような愛着スタイル”としている。
- 4) このような愛着スタイル間の違いは、愛着の理論的背景に対応するような形で、認められている。例えば、安定型の人は幸せで、信頼できる、友情のあるような関係を持ちやすいが、反対にアンビバレント型の人は情緒の起伏の激しい、嫉妬や強迫的に相手に没頭するといったような関係を築く傾向にあった。また、成人の愛着関係は早期における両親と子供の関係の報告とも関連があり、例えば、安定型の人は、回避型やアンビバレント型の人と比べて、自身の両親をより尊敬し、受け容れていた。
- 5) Hazan & Shaver(1987)は、成人の愛着尺度(Adult Attachment Scale)によって各愛着スタイルに分類される回答者の割合が、Ainsworth *et al.* (1978)の研究とほぼ同等であったことも、幼児期の愛着と成人の愛着スタイルの対応を示すことの一つの根拠としてあげている。
- 6) しかし、それと同時に、成人における恋愛と幼児期の愛着との間には明らかな相違点があることについてもShaverらは言及している。Shaverらの指摘した相違点は2つあり、その一つは養護やケアの対称・非対称性、もう一つは性的な要素、セクシュアリティである。この点から、Shaver & Hazan(1988)は成人における恋愛が、愛着、養護(ケア)、性的要素(セクシュアリ

ティ)という3つの行動体系が統合されたものであるとの見解を示している。

7) 筆者の見解としては、Hendrick & Hendrick(1989)のように、対人関係への信念と期待として考えられる愛着スタイル尺度で測定されたものとラブスタイルのような恋愛関係における特定の個人を想起させるような形で回答する尺度で測定されるものとを並列に扱うことには疑問を感じる。実際、Hendrick & Hendrick(1986)は、ラブスタイルが特性なのが関係性を対象としているのか、さらにラブスタイルが何故、いかにして形成されるのかについて明確な回答を示していない。

8) 一般的には3類型の愛着スタイルにおける回避型(Avoidant)が、DismissingとFearfulに分化されたものであると考えられる。

9) 自己モデル軸における得点(依存性・関係不安)は、ポジティブな自己モデルを持つSecureとDismissing得点を足し合わせたものからネガティブな自己モデルを持つPreoccupiedとFearful得点を引くことにより算出され、また、他者モデル軸での得点(親密さからの回避)は、ポジティブな他者モデルを持つSecureとPreoccupied得点を足し合わせたものからネガティブな他者モデルを持つDismissingとFearful得点を引くことにより算出される。

10) また、成人の愛着スタイルが、自己報告のパーソナリティとだけではなく、他者からのパーソナティ評定とも関連すること(Bartholomew & Horowitz, 1991; Griffin & Bartholomew, 1994)を考慮するのであれば、他者期待効果、ピグマリオン効果やゴーレム効果も愛着の安定性に重要な役割を果たしていると考えられよう。

11) この場合の愛着スタイルは、これまで述べてきたような自己および一般的他者への期待や信念といったものではなく、想起した特定の他者への不安もしくは回避傾向といったものである。

Review of recent studies on adult attachment and the prospects for the future studies

Yuji KANEMASA (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Recently there has been numerous studies concerning about adult attachment, especially in Western countries. Studies on adult attachment offer the developmental and time-series perspective to understand interpersonal relationship because they are based on Bowlby's attachment theory. Having these benefits, adult attachment studies have been conducted from various points of view, and the amount of knowledge has been accumulated. However, problems involved in adult attachment studies increase while their research areas are extending. This paper firstly makes brief reference to Bowlby's attachment theory which is the root of adult attachment studies, and then, notes two methods of adult attachment measure mainly used in recent researches (the Adult Attachment Interview-AAI and the Adult Attachment Questionnaire-AAQ). After that, this paper reviews several empirical studies concerning adult attachment, focusing mostly on studies with self-report adult attachment questionnaires. At last, this paper points out several problems involved in adult attachment studies and discusses the issues to be solved and the prospects for the future researches on this filed.

Keywords: adult attachment style, internal working model, attachment dimension, attachment figure, relationship